



號二十七第
月九年八十和昭
行發日十同一月每
錢五部一價定
錢十六(共稅)分年一
一才 田杉 編行發
社信通盟同 所行發

必勝態勢と世界情勢

社長 古野伊之助

國民試練の秋

最近の世界情勢をみて感ずることは、よい一億國民試練の秋が来たといふことである。諸君も日々の職場を通じてよく解つて居られる通り歐洲の戦局は漸く重大な段階に入つたと思はれる。何とかして戦禍から免れたいと焦つたイタリヤは遂にあのやうな状態である。われわれの電報を通じてその経緯は一々報道してゐるが、手許でこの推移を観察してゐるわれわれ同盟の同人は、この點に關する明確な認識がなければならぬ。

第一次世界大戦の實例に徴しても世界の民衆が戦局の推移に注意を奪はれてゐる間に、ドンドン國內崩壊が行はれ、國內が分裂して戦敗國の憂目のみたしたのである。戦争の最後の結末は決して野戦の勝負のみで済まされるのではない。

イタリヤの國內分裂

しかして戦禍から免れ、戦亂の巷から通れんとしたイタリヤ國民は國內が分裂し、今日のイタリヤを築いたファシスト黨と袂を分つて國內分裂の姿勢に入つた。若し反極軸側がもう少し精巧であつたならば、歐洲の情勢は可なり變つた局面をみたと思ふ。

徒に北阿における戦捷、シチリアにおける有利な情勢にのぼせ上つて高壓的手段をとつた結果はイタリヤをして、その進退がいづれにあるかを誤らしめてしまつた。しかして無理矢理にドイツの側に押しやつてしまつたといふのが、ムツソリーニ失脚以後の状態であると思ふ。

既に國內が分裂してしまつたイタリヤが極軸國の一員として多くを期待し得ざることは申すまでもない。次に來るべきものはドイツが一體これから如何に強力に歐洲戦争を戦ひ抜くかといふことであらう。これまた當面の戦況だけをみてゐては判らない。ドイツはいよいよ國內結束を堅固にし、最後の勝利に突進することを信ずるものであるが、その間いつ何ん時、歐洲に如何なる變事が起らぬとも限らないといふことも、われわれはよく考へておかななくてはならぬと思ふ。

歐洲情勢對處の覺悟

一面に各方面の戦線で戦争を繼續しながら、裏面において想像も許さぬ幾多の政治工作、外交上の陰謀などが繰返され、いつ何ん時如何なる事態を惹き起さぬとも限らない。

イタリヤのごときも全く全世界にとつては青天の霹靂であつた。かやうな情勢であるので、歐洲の戦局は何時如何なる風雲を捲き起さぬとも限らないといふことを、われわれ日本國民はしつかり肚に入れて叩き込んでおかなければならぬと思ふ。

いづれの場合においても歐洲情勢の最悪の事態といふものに對する萬全の心構えと準備がなければならぬ。われわれとしては、どこまでも歐洲情勢の最悪の事態に對處すべきわれわれ自身の覺悟を常に確乎不拔のものとなし置くべきである。

東亞戦局の新展開

眼を轉じて一度東亞の情勢をみれば、これまた當然の事態が今や正にわれわれの眼前に展開されるにいたつたといふのはおぼろげではない。大東亞戦争は、そもそも日本と米國との根本的な喧嘩ひ、思ひ違ひから始つてゐるのである。靜かに宣戰の大詔を拜した當時の情勢を思ひ起せば直ちに誰の胸にもはつきり背かれるのであるが、米國は四年有半に亘る支那事變の結果、日本の國力が徹底的に消耗してゐると思ひ込んで、ただ經濟的壓迫の一手で押し潰せると考へてゐた。これに對し日本は米國の對日經濟壓迫の手段の一つ一つが、わが民族の生死を決定する重大なる局面であるといふ沈痛悲壯な決意から截戈をとつて起たざるを得ない場面に追ひ詰められたのである。

米英の野望を粉碎

かくのごとくにして日本は米國が油断に油断を重ねてゐるところへ、國家民族存亡與廢を賭する一大決心を固めて、その總力を掲げてぶつつかつたのである。勝つのが當然である。緒戦僅に六ヶ月の間に東亞における米英の侵略勢力は一掃された。

餘りに赫々たる戦果の連続であつたため、われら日本國民は、やもすると存外造作もなく戦争が片着きそうなる安易なもの考へ方に陥り勝ちではないかと思ふ。

しかし米英は自ら誇る世界最大最強の老大大國である。油断して思ひ上つてゐる間は滅茶苦茶に叩きつけられたが、敗戦の夢から醒めていよいよ本氣に準備を整へて起上つた場合は相當手應へあるのは當然のことである。私は大東亞戦争で本當の雌雄を決するのはこれからだと思ふ。

米國はその國の總力を擧げ、全生産力、全科學力、全工業力を動員し、彼等の東亞制覇の野望を果して遂げ得るか否か試みるがよい。われわれ日本民族は東亞における十億の諸民族を糾合して、この地球の上になれわれ十億の東亞民族の生存を確保するため全能力、全智識を傾倒して徹底的に、その野望を粉碎するのみである。

敵も眞剣だ

これがこれからの仕事となるのだ。科學者は科學者の立場で、工業者は工業者の立場で、農民は農民の立場で、われわれはわれわれの戦場において、この對米英の決戦を戦ひ抜くのである。

敵が十分用意して全能力を掲げて、國家の總力を動員して、各々把持するところの主張、その立場を腕づくで決定しようとするのである。

ある。

この戦に勝ち抜けば、もちろん日本民族は東亞十億の民族を掲げて世界の安定勢力となるのである。誤つて敗るれば永久に米英の奴隷となることはいふまでもない。

必勝不敗の態勢

この大きな歴史の方向と人類の運命を決定する大戦争を、しかもこの戦はかやうに申してゐるこの瞬間にも、昨日も今日も、この一日、この一ヶ月、この間に、この大決戦を展開しつつかつたのである。

ソロモン、ニューギニアの戦が相當苦戦であることは當然である。またビルマへの敵反攻作戦も當然再び企圖されることであらう。重慶も策動するだらう。その他あらゆる條件を全部計算に入れて敵を徹底的に粉碎することが、この時代に皇國日本に生を受けた一億國民の任務であり、また光榮である。戦争は前線で將兵が戦つてゐるばかりではない。われわれも戦場を戦つてゐるのである。こんなことでは今日誰にもわかり切つた認識である。しかしその認識を現實に自分の戦場で、日々の生活の上に實踐射行し得るや否やが問題なのである。

この戦闘はアメリカが徹底的な短期決戦を望んでも、日本の戦力は一日延びれば一日延びるほど増大する一方である。緒戦の戦果によつて、必勝の足場が完全に固められ、不敗の軍略的立場が出来た。そして十分自給自足し得る經濟的姿勢も出来た。これでこの戦を勝ち抜けない腰抜けの一億ならむしろ潰れてしまつた方がよいとさへ私は思つてゐる。

前線出動の同志

どうか千載一遇の時期に、われわれは直面してゐるのであるから

それぞれの戦場で、この大戦争を戦ひ抜ける恵まれた立場を自覺して、あらゆる苦難を克服して頂きたい。今後何年かかつてもこの戦を徹底的に頭張り抜き、勝ち抜けねばならぬ。

敵米英には何等戦争目的を有しない。ただ單なる自國の強大と繁榮を求めた以外に大義名分がない。東亞遠征の夢に惑はされて、五千万、一億キロもやつて來る米英の敗残軍である。これを粉碎することは何でもないことだ。われわれ同盟は今日ただ戦場で戦つてゐるばかりでなく、毎日毎日前線へ前線へと、われわれの同志が國のお召しに應じて繰出されてゐる。

必勝の信念に徹せよ

編輯局次長 萩野伊八

第二次 世界大戦も満四年を

経過し、この九月からは第五年目に入った。大東亞戦争亦勃發以來二年に近からんとして既に決戦段階に突入してゐる。しかも歐洲においては同盟國獨逸は中西部歐洲本土から敵兵を全部驅逐して堅固なる歐洲要塞を確立し軍事的には不敗の態勢を完成した。我が國亦太平洋において東西南北各々一萬軒に及ぶ廣大な地域に必勝態勢を確保するに至つた。

然るに現在の世界戦局に關し敵國の執拗飽くなき謀略により日獨側が不利なる情勢に逆轉せるかのごとき印象が各方面に芽生えてゐるが、かくのごときは頗る遺憾千萬なことだ。余人はいざしらず、この重大なる世界戦局の過程にあつて對内外の思想戦分野を擔當してゐる吾等同盟五千の同志は特に現下の情勢の真相を把握し、いよいよ必勝の信念に徹し、勇往邁進せねばならぬ。

對獨空襲

最近急に熾烈化して來た英米の對獨空襲は一夜にして廢都と化し、ベルリンは過般五、六百機より成る重爆撃機隊により四十六分間に一千六百噸の爆弾を投下されたといはれてゐる。ベルリンの受けた被害の程度はもろん相當なものである。しかしながら空襲は假令それが如何に大規模のものであつても、單なる空襲のみをもつては旺盛なる抗戰意識を所持する國民に對しては戰争意志を放棄せしむることは不可能である。

然らば何を不利なる情勢といふか、われわれはここに一應敵側の宣傳する所謂不利なる情勢なるものの現象を列挙し來つて、その然らざる所以を明白に駁撃し、進んで敵側の弱點を衝いてみよう。

イタリヤ

過般の政變を目撃した上稀に見るロンドン襲撃においても敵英國民の戰争意志を挫折せしむることは出来なかつた。殊に過般の英米聯合空軍のベルリン空襲における損耗率は一割に達してゐる。ルーミアニア油田地に對する空襲では反艦機隊に二割以上の損耗を生じてゐる。

敵米英が如何に航空機生産に天

文學的數字を誇つたところで、乗員の點から制限が來るので、かかる高率の損耗をいつまでも、續けて行くことは出来ない。かくして敵が全世界に誇示せんとした空襲も彼等所期の効果を擧げ得ざることに明白となりつつある。

ソロモン

群島方面の戰況が

敵は空軍が非常に充實した結果であるとなし、如何にも日本側に對策なきを憫笑するが如き態度に出でゐる。しかしこれは守るものと攻るものの立場の相違である。ゲリラ式に攻めようとするなら如何に我が方が鐵壁の陣を固めて加へ得るのである。かくのごとき點まで神經質に騒ぎ立てる必要はない。

ゲリラ式

に爆撃をやつて來る。これをもつて

敵の意圖するところはかかるゲリラ戦法によつてわが方の兵力配備を攪亂せんとするにあることは明白である。故にわが方はあくまで重點的に兵力を使用して頑張りばそれで充分であるのだ。如何に彼等が種々の神經戦法に出てもそれに乘る必要は毫もない。

最近敵側の宣傳方針をみると日本艦隊に決戦を求めても日本側は避けてゐると頻りに日本海軍を焦慮さす戦法に出でゐる。又日本航空戦力が毎月漸減してゐるとして中立國側に働きかけてゐる。これは彼等が逆に日本海軍の主力艦隊の健全なること並に航空機生産力が日に増強しつつあることが彼等の頭痛の種なることを物語るものなのだ。

以上最近の情勢を消極的に辯明的解説を下したが以下進んで積極的の敵の脆弱點を衝かう。先づ

敵米國の

人的資源の枯渇だ

生産計畫はほとんど兵力として使用すべき資源を使い盡してゐる。

敵米は現在陸海軍合して約七百萬を動員してゐるが將來一千百萬にまで増加せんとしてゐる。しかしながらこれがために手持ちの男子まで徴集せねばならず、これは敵國內で大々的に反對を受けてゐるところだ。敵米が現在既に國外へ派遣の兵力は二百萬(實際はこの半分)といはれてゐるから今後の海外派遣能力は百萬前後であらう。これをもつては歐洲にソ聯の満足する様な第二戦線を作り、ビルマに増兵したり、西南太平洋の戦場へ送り得る米兵力といふものは眞に寥々たるものである。

敵英は既に動員の限界點に達してゐる故現在以上の動員は出來ず頼りとするところは米のみである。米の兵力は以上述べた次第である。しかも敵米は軍需關係労働者一千百萬、農業労働者一千二百萬が必要であり、この外に民需産業労働者及び自家労働者が六千萬も必要といふ勘定になつてゐるから全人口一億三千萬の何處からこれらの人的資源を捻出しようといふのであるか。

また敵米の壯丁中には驚くべき數に上る良心違反者(徴兵忌避者)を繰出せしめつつある。その數は萬をもつて數へられるのである。これら所謂

良心違反

者共のあびただし

き數を收容せるキャンプは米國中部の不毛の地に設けられ、農耕作その他の苦役に就かせられてゐるのである。自由擁護者をもつて任じてゐる敵米國民とは凡そかくのごとき存在なのである。これをもつて如何にして彼等が現在の世界新秩序建設といふ崇高なる目標を持てる戦争を最後まで戦ひ抜けるであらうか、斷じて否である。

中支總局移轉

中支總局は九月四日左記に移轉した。

上海黃浦灘路十七號大同大樓

威興支局開設

九月一日附左記支局を開設、業務を開始した。

朝鮮威興府中央通三ノ三六

決戦下真剣味溢るる 北支總局の防空演習を見る

黄河を越せば文句なく敵影をみることができるといふ華北において、大陸防衛の第一線に挺身するわが北支總局では、日とともに苛烈化する大東亞戰爭決戦の様相を正しく捉へ、進退出所に誤りなきを期するため、八月十三日産報會同盟北支總隊の結成式を行つたがさらにこの産報組織を根幹として北京市特別防護團同盟分團の編成を完了し、二十九日第一回の防空訓練を實施した。この日數日來つづいた雨も霽れて澄んだ秋空には浮雲の影さへとどめない。午後三時二十分、突如として『演習警報』の發令がある。總局支關口に



陣どつた連絡班が息せき切つて分團本部に飛込んで來た。警報は直ぐさま中村編輯部長指揮の監査班を通じて各班に傳達される。活動着に若さを包んだ女子部隊が、配給、救護の二班に分れて所定の位置についた。猪股華文部長指揮の避難者誘導班が幼児を護つて避難所へ急ぐ。阿部通信部長指揮の避難監視班は重要書類や貴重品を安全な個所へ移す。三分、四分、準備完了の報告が次から次へと本部に齎される。敵機來らば來れと待つ間もなく、三時二十九分『演習空襲警報』の發令となる。空襲報知の赤旗がサツと掲げられた。鈴木總務部長指揮の防火消火班は空を睨んでキツと身構へる。手押ポンプ、火叩梯子、とび口、濡れ蓆、水桶、バケツなどみんな揃つてゐる。揃つてゐるのは單に道具ばかりではない。われらの職場を護り通して報道といふ大きな仕事を一刻たりとも遅延せしめまいとする烈々の氣魄が一つに凝結して火と燃えてゐたことだ。發令後間もなく焼夷彈が中庭

に落下した。防火消火班は時を移さず活動を開始し、配給班の女子部隊もバケツをさげて加勢に飛出す。水、砂、蓆が四方から飛んだ。つづいて一個また一個、敵は通信機材の破壊を企圖して爆彈の雨を降らせるが、われら鐵桶の防護陣を抜くにいたらぬ。落下した焼夷彈は悉く消しとめられて、薄れゆく硝煙の中に儼たる同盟の姿をみる。

午後四時十分演習終了。佐々木分團長の講評は『全員よく活動したがまだ充分とはいへない。あれでは總局は一片の灰になつてしまつたらう』といふ香しからぬものではあつたが、真剣味溢した訓練ぶりから推して、敵機の空襲に耐へ得るといふ自信をつけることができた。ひきつづき防空懇談會が行はれ、夜の膳には配給班の健闘を物語るおむすび三個が防空戰士の食慾をそそらせた。(北支總局報、寫眞は消火班の敢闘振)



【七月分】

△結婚

- 水村 將義 (聯絡局)
- 林 東作 (名古屋支社)
- 岡本 絹子 (福岡支社)
- 花田 チエノ (福岡支社)
- 齋藤 敏雄 (臺中支局)
- 戸田 大八郎 (南京支局)
- 鈴木 大 (青森支局)

△出産

- 村井 茂 (經濟局) 長男
- 山田 清一郎 (九江支局) 次女
- 小笠原 進 (編輯局) 男子
- 澤砥 政雄 (海外局) 次女
- 岩佐 儀 (編輯局) 長男
- 小澤 俊則 (仙臺支局) 長男

△見舞

- 赤星 勝夫 (大阪支社) 次男
- 刀根 治平 (福岡支社) 長男
- 松尾 勝太 (長崎支局) 四男
- 高橋 清 (廈門支局) 長男
- 甲野 金慶 (大分支局) 次男
- 松原 弘雄 (中支總局) 長女
- 今高 隆二 (南支總局) 次男
- 明峰 嘉夫 (編輯局)
- 田中 清市 (編輯局)
- 寺西 五郎 (經濟局)
- 南 英耕 (編輯局)
- 久原 一馬 (關門支社)
- 辻本 政一 (大阪支社)
- 岡野 忠一 (同)
- 荒井 忠三郎 (花蓮港支局)
- 森 莊三 (經濟局) 病氣
- 田淵 勝 (同)
- 西井 孝一 (編輯局) 同
- 西村 二郎 (同) 夫人病氣
- 藤田 一雄 (經濟局) 子供病氣
- 玉井 平太郎 (編輯局) 長男、次男
- 永由 君人 (南方總局) 男、二男、四男病氣
- 周藤 清 (聯絡局) 病氣
- 溝江 進 (編輯局) 同
- 木村 榮次郎 (同) 同
- 大場 健次 (同) 同
- 大平 安孝 (同) 夫人病氣
- 北方 時男 (同) 病氣
- 日高 定雄 (經濟局) 同
- 松尾 登美子 (總務局) 同
- 野澤 たき子 (同) 同
- 林 潤 庚 (高雄支局) 同
- 木田 秀光 (名古屋支社) 夫人病氣
- 太田 運喜 (同) 病氣
- 佐々木 洋子 (仙臺支局) 同
- 中島 和夫 (京城支社) 夫人病氣
- 下條 彌一郎 (富山支局) 病氣
- 浦中 薫 (熊本支局) 同
- 藤原 キミ (同) 同
- 丸野 恢 (神戸支局) 同
- 茨木 定徳 (同) 同
- 徳永 廉 (同) 同
- 徳永 廉 (同) 夫人、長男、病氣
- 山本 二三 (漢口支局) 病氣
- 漆原 治 (大阪支社) 同
- 長尾 義男 (同) 同
- 正木 和雄 (同) 同

△弔慰

- 菊池 忠夫 (同) 同
- 竹内 榮 (同) 同
- 木島 時子 (同) 同
- 絹井 三郎 (平壤支局) 同
- 倉澤 徳治 (長野支局) 同
- 如 敬 (臺灣南支局) 夫人病氣
- 佐藤 二郎 (旭川支局) 病氣
- 山口 一穂 (鹿兒島) 同
- 新谷 明 (同) 同
- 岡野 久子 (佐賀支局) 同
- 瀧野 一月 (同) 同
- 染川 禎二 (同) 次男病氣
- 渡邊 明 (中支總局) 病氣
- 加藤 正一 (廣島支局) 同
- 戸田 大八郎 (南京支局) 同
- 丸山 喜作 (金澤支局) 同
- 本田 良介 (伯林支局) 父死亡
- 瀨藤 智 (小樽支局) 戰死
- 久保田 清松 (天津支局) 長女死亡
- 阿部 正文 (聯絡局) 戰死
- 富田 基 (同) 母死亡
- 富田 市之進 (編輯局) 死亡
- 菅原 金吾 (名古屋支社) 實父死亡
- 松川 秋太郎 (仙臺支局) 長女死亡
- 古川 仁善 (京城支社) 長女死亡
- 多田 羅 弘 (大阪支社) 死亡
- 田中 彰 (福岡支社) 實兄死亡
- 磯田 小四郎 (中支總局) 女兒死亡
- 丸山 房子 (聯絡局)
- 栗本 賢一 (聯絡局)
- 栗栖 平造 (聯絡局)
- 吉村 孝 (編輯局)
- 小野 利幸 (京城支社)
- 新谷 鐵男 (編輯局)
- 寺崎 忠夫 (編輯局)
- 長島 忠子 (經濟局)
- 小倉 信子 (編輯局)
- 土井 信子 (同)
- 大藏 文子 (同)
- 小川 彰 (名古屋支社)
- 宮脇 良一 (大阪支社)
- 松野 文吉 (同)
- 金川 承吉 (清津支局)
- 山口 一穂 (鹿兒島支局)
- 山崎 茂美 (大分支局)
- 堀本 美代子 (釜山支局)
- 松井 昌隆 (横濱支局)
- 蓮井 登志子 (大阪支社)
- 合計 (件數 七六四〇件、金額 七六四〇圓)

出版部だより

九月十一日より發賣の新刊書

〔戦時特許〕
17 緊迫せる獨逸軍需工業
池上幹徳著 〇・二五
18 木 造 船
岡田良一著 〇・二五
(日本思想戰戰叢書)
(大日本言論報國會編)
各 (B6判平均二五〇頁、各 (實價) 一圓二四錢)

第一輯 世界觀の戰
(執筆著) 鹿子木員信、作田莊一、高山若男、井澤弘、秋山謙藏、市川房枝、大島豊、小牧實繁

第二輯 思想戰の根柢
(執筆著) 山田孝雄、佐藤通次、匝巻胤次、古川武、中柴末純、新明正道、住田正一、津久井龍雄

第三輯 國家と文化
(執筆著) 西晋一郎、大川周明、齋藤响、齋藤忠、藤田徳太郎、天川信雄、穂積七郎、野村重臣

九月廿一日より發賣の新刊書

寺西五郎著
アメリカ力戰争經濟批判
B6判二六〇頁
實價一圓二三錢

J・L・クラスタチヤン著
現代ビルマの全貌
A5判五八〇頁
實價六圓七六錢

T・F・G・ミルナー著
太平洋問題調査部譯
東亞共榮圈と
ニュージールランド
A5判二三〇頁
實價三圓一〇錢



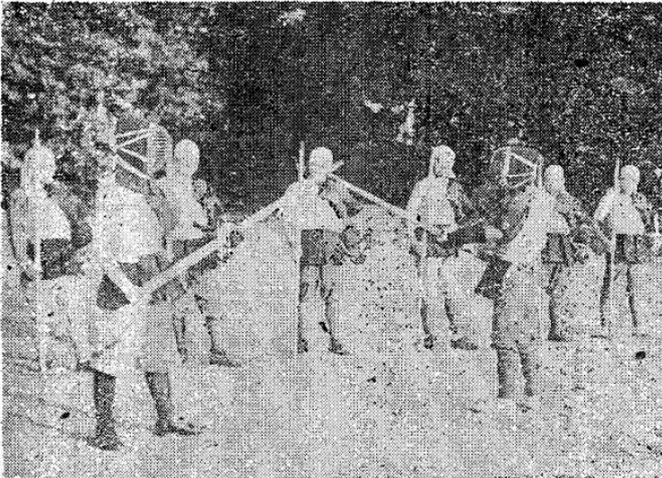
筆劍一如

同盟郷軍

活躍す

「老人も子供も、男も女も、一朝有事の場合必ず起つと言ふ準備が無ければならぬ」同盟通信報八月號所載「古野社長の獅子吼に應へて帝國在郷軍人會同盟分會は八月初旬より既教育、未教育とも、それれ銃剣術土用稽古を實施し、炎天下に裂帛の氣合も勇ましく一週間に涉り偉風日比谷原頭を壓するの觀があつたが、同盟分會は引續き、同盟産業報國會の要請により、先づ同本隊を皮切りに各青年隊、各女子隊の銃剣術演習を四週間に涉つて指導し、全く炎暑を克服したつた。

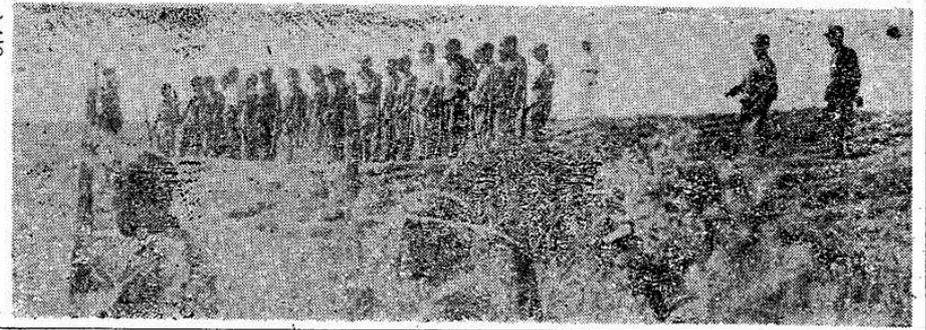
その間、分會は三回に分つて、未教育兵の野外訓練を實施、即ち



土曜日の夜より月曜日朝にかけて同盟多摩道場に舍營した。この演習では大森分會副長(政經部長)を教官とし、陣中勤務、戰鬥教練に煙草一服つける間もなき猛訓練を續け、實戰的體験を積んで深夜十二時立川(文書部)の吹き鳴らす消燈喇叭の餘韻未だ消えざるに、早くもそちちから斬聲が聞えて來るやうな勢であつた。

本演習においては歩哨、分哨、斥候、散開、前進、突撃等を演練し、得る所少くなかつたのであるが、特に參會者を感じさせたのは古野社長、鷹嘴常務、塚本、大平の各局長、人事、庶務、厚生、各部長等、社幹部が連日總出で激勵せられたことである。又小夜食の馬鈴薯は今春以來青年隊の手で開墾された同盟多摩農場の所産で、すばらしく效果的に全參會者の歡呼をもつて迎へられた。

八月の全演習を通じて、一千五百の本社全員はそれぞれ軍事教育を受けたのであるが、産報本隊の訓練の時、局長、部長の全員これに参加、特に鷹嘴常務理事は卷脚絆姿も勇ましく木銃を奮つて陣頭指揮の勢を示



した。

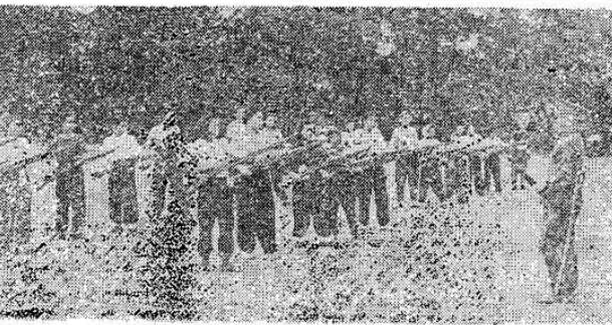
又既教育兵の稽古は文字通り、血塗れのすさまじい演練であり、女子隊の演練に際しては三隊長および各班長は二週間連続して出場するなど出席率は百パーセントに近く士氣大いに昂つた。

同盟分會の演習場、日比谷公園はその昔、明治天皇が御親ら近衛兵の演練をみそなはせ給うた日比谷ヶ原の跡であることを思ひ、この聖蹟において奇しくも決戦下、同盟本社勤務員全員の軍事訓練をなし得たことを光榮とし、いよいよ緊迫化する決戦下米英撃滅の聖戰必勝の信念を益々固くするのであつた。

同盟分會幹部一覽

顧問	古野伊之助
分會長	白仁進
副會長	大森吉五郎
參事	松本金吉
同	三宅勇藏
同	日比野良夫
同	松岡韶
同	倉田正一
同	山之内保三
同	加藤義郎
同	木口次郎
同	齋藤桂助
同	前田茂千代
同	荻田英祥
同	上村藤吉
同	齋藤桂助
同	野口勇一
同	芥川典
同	永山公明
同	渡邊忠恕
同	村上辰雄
同	清水正吉
同	福田正義
同	長島國彦
同	松岡韶
同	高橋正則
同	高柳節夫
同	長田政次郎
同	齊藤保
同	殿木圭一
同	高橋榮一
同	馬島勇
同	三宅勇藏
同	松田常雄
同	八百嘉忠
同	田崎花馬
同	加藤義郎
同	三浦良知
同	塚本員之助
同	高島宏
同	山内保三
同	大澤正作

一組長	(技研)	竹川光二
二組長	(電務)	大富信二
三組長	(通信)	安達三郎
四組長	(航空)	塚本松哉
五組長	(發送)	鈴木又次
六組長	(總務)	日比野良夫
一組長	(出版)	佐々木公庸
二組長	(厚生)	三浦正教
三組長	(文書)	立川光夫



寫眞説明) ①戰鬥教練修習、②既教育在郷軍人の銃剣術土用稽古、③野外教練陣中勤務、左端は分哨勤務を説明中の白仁教官、女子隊の銃剣術、④産報本隊における戰鬥教練散開前進

課目	日次	教練場	教官	講習員
訓練教育	九月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	五月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	六月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	七月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	八月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	九月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	十二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	一月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	二月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	三月二十九日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育	四月四日	比谷	日比野良夫	會員者
訓練教育				

これは有難い 茶の湯慰問

大阪支社員満悦の巻

我等報道戦士日頃の活動に對して、この程大阪茶道報國會の矢野宗粹宗匠から「茶の湯」をもつて慰問しようといふ申出があつた。日本古來傳統の藝道にいささかタヂメの態だつたが、八月三十一日午後三時矢野宗匠、渡邊振興部長以下令嬢、御婦人部隊十餘名

經濟局部名變更

經濟局「解説部」は八月一日より時事解説編輯事務の内經部移管とともに「週報部」と改稱することとなつた。

東洋の蘭

大陸部次長 松本金吉

私がこゝにいふ東洋蘭とは蘭科植物中『シンピデウム』に屬する地生種にして本邦、支那、その他温暖地方に産するものの總稱である。

生きてゐた蘭

蘭の栽培といふものは非常にむづかしいものだらうかと聞けば、いやそんならむづかしいものではないと多くの人は答へる。それでは容易いのかと問へば、いやむづかしいものだと言へる。一體どちらがほんたうの言葉だらうか。誰しもそこに一種の疑心を感じるであらうが、私はたゞ普通に蘭を養ふとか、蘭そのものが非常に好き人であれば、こんなに作り易いものはないと考へる。しかし餘り好きでない人、或は營利的に急に



の慰問團か、頸の落ちそうな御菓子持參で御入來、支社員は相好くくづして設けの席につく。かくて

結束支社長以下いづれも御流儀を敬遠して心臓流で有難く頂戴(寫眞を熟視して下さい)總勢五十名茶道三昧に浸ることを得たのであつた。(M・K生)

炎天下の強行軍

名古屋支社員

名古屋支社では八月八日大詔奉戴記念日の日曜強行軍を試みた。午前十時三箇中隊に編成の男女全員は決戦服に身をかけたため、知多半島遙か常滑町に集合、それより社旗を先頭に炎天下の半島を南へ九キロ多賀神社に參拜、戰勝祈願の後同路を引返し、同盟夏期鍊成所に歸着晝食をとつたのが午後二時半であつた。相當強行軍であつたが、女子部隊もよく頑張り、



一名の落伍者なく團體訓練の成果を十分に收め得たのであつた。(寫眞は多賀神社々頭の一行)

輜重兵の龜鑑

湯田君表彰さる

昨年四月兩館支局在勤より應召した湯田保司君は目下北支にあつて日夜軍務に勤勞してゐるが去る十八春大行作戦における勇敢無比の働きが上司に認められ左の表彰状を授與されるとともに、上等兵に進級せしめられるの榮譽に輝いた。同君のこの武勳は同盟魂を戦野に發揮したものと云ふべきである。

(表彰狀) 一等兵 湯田 保司
右者今期十八春大行作戦に於て○

隊が○山地を發登中右側背高地より重火器を有する優勢なる敵の急襲撃を受け、自己○隊の馬敵彈のため積載品諸共斷崖より轉落せし際、輸送品の敵に奪取されるを豫察して敵彈雨蔽の如く飛來する中を意に介せず、斷崖を下りて積載品たる山砲、彈藥を駈鞍より離脱し、之を臂力にて再び山頂に攀登し、○隊の集結位置に搬出して克く輸送品を安全ならしめた。湯田一等兵の沈着豪膽、軍需品保全の一念に始終せしその旺盛なる責任觀念は輜重の本領を遺憾なく發揮したものと云ふべく、我等輜重兵科の龜鑑とすべきものなり。依つて茲に之を表彰す。
昭和十八年六月十三日
○部隊長

繁殖させるとか、又は非常に立派な花を咲かせやうとかいふことになれば又問題は別である。

私の應召の年の間放擲されてゐた幾鉢かの蘭は作下りこそしてゐたがそれでもみんな生きてゐた。最も強い種類である建蘭は今年もいくつかの花をつけた。然し放擲されてゐたものであるから、勿論私の留守中といへど家の者が心配して、見た眞似で灌水したり掃除をしてくれたお蔭には違ひない。蘭自體がかなり丈夫な植物で水をやらなかつたから直ぐ枯れてしまふとか、肥料をやらなければ絶対に成長しないとかいふやうなものではないらしい。元來蘭は植物學上『シンピデウム』の一屬といはれる四、五百尺の低山植物で、林間の半蔭地に自生するものであるから

西洋趣味の草花

ダリヤ、カンナ、チューリップ、シネリア、アマリスなど西洋花の色彩はネオンランプの火のごとく人目を強くは引くけれど、しみじみと飽かず眺めるだけの落ち着いたやうな味がある。それらには絢爛麗しの奪ふ色彩はあつても、東洋蘭に見るやうなあの枯淡な錆びた味も深さも感じられない。そしてそこからは都會的な騒音は聞えても滾々と湧き出づる谷間の岩清水の音は求められない。

東洋蘭は墨繪である。葉の青一色の中に、何か生動する氣品がある。この氣品こそ幾十色の色彩以上に我々に迫る魅力がある。

蘭栽培の效用

西洋種の草花は概してその色彩がドギツク、その香はむせかへるやうなものが多いが、東洋蘭の花は上品は勿論建蘭、玉華に至るまでその色は何れも清楚であり、その香は古來美人香草、五者香、幽谷の君子等の異名がある程麗都としてゐる。即ち花開けば香氣室に満ち人を魅惑せずにはおかない。蘭の芳香は實際口にも筆にも現すことの出来ぬ程のものである。如何に最高の香料と比較しても到底蘭に及ぶものはないであらう。

蘭を愛する者は四時優美な姿を持つ青々としたその葉を見て嬉しみ、花時は高尚にして雅致に富む

滿洲で學ぶ

滿洲は寒冷の地であるから蘭の産地ではないが、たまたま滿洲國皇室の御紋章が蘭花である關係からか、五年の滿洲生活で急に蘭に對する愛情が募り、上記のやうな

物見遊山は名を鍊成に換へても重要物資輸送の邪魔になる。家を空けるは家庭防空を疎かにする結果となる。蘭作りは靜寂な天地において自己の精神を養ひ、日光に浴して適當な運動が出来るといふものである。

戰時下趣味などいふことは遠慮すべきことかも知れないが、どうせ眺めて喜ぶならば日本的人物の方が歡迎するべきであり、又蘭にはそれに價する充分な資格がある筈である。